ポール・ド・マンをたんに読む
――ロドルフ・ガシェ『読むことのワイルド・カード』というプロセス

吉国浩哉

ロドルフ・ガシェの『読むことのワイルド・カード』は、その副題が示すとおり、「ポール・ド・マンについて」書かれた書なのだが、興味深いことに、ガシェ自身がそのド・マンの著作を「少なくとも最初は、何も理解できなかった」と告白することから始まっている[1]。もちろん、このような理解の失敗から始まり、徐々にド・マンの「理論」を理解することへとガシェの思索は向かうことになる。そして、このような動向自体が本書の中で一つのナラティヴを形成していると見ることもできるかもしれない。しかし、この冒頭の「理解」失敗の余韻は、奇妙な仕方でガシェの、このテクストに最後まで漂っている。その後の本論におけるガシェの論点がすこぶる明白であるとしてもである。それはド・マンのテクストを「理解」すること、ないしはそこに「意味」を見いだすことの可能性自体がポール・ド・マン論では問題となっているかのようである。この理解の挫折の質そのものに関わる問題が。

ガシェ本人も述べているように、彼の著作はいつも何らかの論争に向けられて書かれている[2]。ゆえにまず、『読むことのワイルド・カード』出版の情況を確認しよう。1966 年にボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学でラカン、バルト、トドロフ、デリダらを招いた「批評の言語と人間の科学」が開催され、そこから北米にフランス現代思想の本格的な導入が始まった。そこで紹介された思想家たちには広い意味で構造主義以降に活動していたという共通点はあったが、個別には哲学、精神分析、文化人類学、歴史などさまざまな学問分野にわたって活動していた多様な知識人たちであった。にもかかわらず、これら多様な思想動向を積極的に受け容れようとしたのはおもに文学科のみであった。その結果として、70 年代から 90 年代初頭にかけて、哲学などの思想書を自由――あるいは個々の文脈を無視して――参照しながら文学テクストについて語ることがこれらの文学科で隆盛を誇ることとなり、そのような研究方法は漠然と（フランクフルト学派とはほとんど関係なく）「批評理論」ないしは「文学理論」と呼ばれるようになった。その

[1] ロドルフ・ガシェ『読むことのワイルド・カード』吉国浩哉、清水一浩、落合一樹訳、月曜社、2021 年、9 頁。以下、本書からの引用は括弧内に示す。
[2] ロドルフ・ガシェ「思考の密度」『いまだない世界を求めて』（吉国浩哉訳、月曜社、2012 年）183 頁。

中でも構造主義以降の文学批評を席巻した文学「理論」がいわゆる「脱構築批評」であった。1966 年のジョンズ・ホプキンズでデリダと出会い、その後親密な関係を築いていたポール・ド・マンは、この哲学者の「脱構築」を応用し、文学「理論」におけるデリダの代弁者と見なされていたが、その最初の成果が 1971 年発表の『盲目と洞察』であった。

このような北米の情況に対して、ベルリン自由大学で博士号取得後、1975 年に渡米したガシェの最初の介入が 1979 年発表の「批評としての脱構築」である。ここではド・マンを脱構築批評に含めつつ、それとデリダの脱構築を区別することが試みられている。すなわち「脱構築批評」ならびにド・マンは、結局のところテクストの自己参照または自己反照性を指摘しているだけであり、それはデリダの哲学的企図とは異なることをガシェは明らかにしたのである[3]。（他方で、文学理論とともに北米に導入されたデリダは、当時は風変わりな文芸批評家、ないしは「文学的詐欺師 literary humbug」として扱われており[4]、その意味でこの時点でのガシェの介入は文学による脱構築の専有への抵抗でもあった。そして、後の『鏡の裏箔』では、デリダをドイツ観念論以降の哲学の伝統に位置づけることが試みられことになる。）

しかし、そのようなガシェの、ド・マンに対する態度に変化が見られることになる。そのあらわれが本書の第一章をなす、1981 年発表の「措定と翻訳」である。ここでは、デリダのみならず、いわゆる「脱構築批評」からもド・マンをさらに区別することが試みられている。つまり、彼の思想そのもののユニークさ、特異性についての考察である。そしてド・マンの死後、1987 年には、ドイツ占領下で彼が親ナチス的な新聞に寄稿していたこと、しかもそのうちの数編にはあからさまな反ユダヤ主義的な表現が含まれていたことが明らかになったが、この事件がド・マンならびに文学「理論」に対して潜在的に抱かれていた嫌悪感を顕在化させることとなる。それまでド・マンを「道徳的に間違っている」、「ニヒリスティック」、あるいは「風変わり」と形容してきた批判者たちに、彼の著作を読まずして非難する口実を与えてしまったのである（9）。しかもそれだけにとどまらず、この事件とともにド・マンや文学「理論」だけではなく、そこに結びづけられていたデリダや脱構築もひとまとめに葬り去られようとしていた（実際にこれ以降、文学研究における「理論」的な関心は一挙に低下することになった）[5]。ガシェの関心は明らかに哲学者としてのデリダならびにその哲学的伝統との交渉にあるが、しかし、この脱構築の危機に際し、デリダとの差異を強調することによってド・マンを見棄てるようなことをガシェはしなかった。ド・マンの仕事をデリダとの関連ではなく、あるいは「脱構築批評」との繋がりでもなく、それ自体として単独で正当に評価すること、そしてそのことによって「ド・マンの著作に公正であろう」とすること（15）、それが『読むことのワイルド・カード』で彼が目指したこと

[3] ロドルフ・ガシェ「批評としての脱構築」『脱構築の力』宮﨑裕助編訳、月曜社、2020 年を参照。
[4] Rodolphe Gasché, *The Tain of the Mirror*, Harvard University Press, 1986, p. 3.
[5] ガシェ「思考の密度」、203 頁。

である。その意味で、ド・マンに関してガシェの戦略は両面的である。すなわち、一方ではド・マンの親ナチ記事を口実にしてその仕事すべてを黙殺しようとする勢力に対抗してド・マン思想の意義を再び問い、他方では（良くも悪くも）ド・マンの思想をデリダと、あるいは「脱構築批評」と混同して評価する勢力に対して両者をはっきりと区別しようとしたのである。このようなガシェの企図の中で、デリダ哲学の文学エピゴーネン、または「脱構築批評」ないしは「批評理論」そのものの権化とみなされたポール・ド・マンが、実はそのような文脈とは文字通り無関係であることを示し、彼自身として真にユニークな存在として際立たせることが目指されたのである。

その意味で、本書はロドルフ・ガシェがポール・ド・マンを「理解」しようとする試みである。「どのような原則にもとづいてド・マンが一見したところ哲学的、言語学的、または文学的にみえるモチーフを結びつけたのかを見極める」のである（12）。ド・マンの思想を、彼の提唱する文学理論を「理解」することがガシェの動因であることはまず言える。それは、まずは脱構築の敵対者、黙殺者――脱構築を意味不明の詭弁であるとみなす人々――への反駁でもあるとみなされるだろう。しかしだからといって、ガシェの「理解」への衝迫は、「理解」という概念自体に懐疑的なド・マン自身への反発でもない。「理解」へと誘うのは、つまり「応答を要求」しているのはまさしくド・マンのテクストそのものである（11）。「理解」なるものは不可能であるとして読むことをやめ、その不可能性をもって結論とするのではなく、むしろその不可能性をも読みこもうとすることによって、さらにラディカルに理解不可能性を追い込む。それはまた、「不可能性」を理解することにより、そしてそれに破綻することによって、その「不可能性」のさらに向こうへと突き進み、それとはまた別のもの、「不可能性」とはまた異なるものを惹起させることになる。しかし、このプロセスは理解不可能性や理解の失敗を実演、劇化、パフォームすることと同じではない。これはあくまでも理解不可能なものを理解しようとする試みであり、そのことを通して理解そのものが徐々に変化を被っていくのである。

そのようなガシェの企図において、ド・マンをして単独的と呼ばしめることになる、その特異な思考がまさしく「読むこと reading」である。本書において、ド・マンが「読むこと」について展開した議論が、愚鈍なまでにガシェによって丁寧になぞられることになる。まず第一章「措定と翻訳」においてガシェはド・マンの『読むことのアレゴリー』を慎重に読みとくが、そこではとくに「修辞的読解」とド・マンが呼ぶものに焦点が合わされる。この「読解」は、文学批評における方法の対立、すなわちテクストを内的に完結したものとみなしてその形式に注目するニュークリティシズムと、テクストが指示するテクスト外の存在との関連に注目する伝統的批評との対立、すなわち「参照主義と形式主義」との対立を乗り超えようとする試みである。ヴラド・ゴズィッチが後に語る、ド・マンを初めて読んだ「当時の印象」、すなわち伝統的批評に

「蔓延していた自己満足」とニュークリティシズムの「気の抜けた教条主義」両方に与さず「それ自身を探し求める思考」（20）とはまさしくこの「修辞的読解」によるのである。そして、ガシェはまず「修辞的読解」、修辞的に読むことを次のように説明する。

> すなわち修辞的読解とはまず第一に、テクストの文法的・概念的・主題論的な全体化が、いかにして当のテクストのイメージ・譬喩・修辞によって脱構築されつつあるのか、それを示してみせる読解なのだ［…］。（38）

この読解は、テクストの内部であれ外部であれ、そこに結びついている——あるいはテクストそのものである——とわれわれが思いなす、意味や概念またはテーマなどが、譬喩、修辞などのテクストを構成する諸要素によって破綻させられているということを露わにする、そのような読解である。テクストの意味をテクスト自体が裏切る、そのことを明らかにする読み方ということだ。つまり、読むことによって、テクストが全体として一つの意味をなすのではなく、全くその逆にそのような全体性が解除される——脱構築される——ことになる。テクストの意味と考えていたものが、誤りであること、テクストからはその意味が導き出せない——つまり断絶している——ことが、読むことによって明らかになるのである。ようするに、ド・マンのいう修辞的読解とはテクスト自身によるテクストの全体化の解除のことであり、そして、テクストがひとつの全体としては「読解不可能」であることを明らかにするような読解である（39）。それによって、テクストを読んでいるつもりだったのが実は読めていないなかった——読んでいなかった——ことに気付くのである。

しかし、ガシェはさらに問う、「テクストを当のテクスト自身に折り返すような修辞的読解は、まさにテクストを全体化するもうひとつの身振りではないだろうか」と。つまり、「読解不可能」なものは、読解不可能なものとしては読解可能なのである。テクストの修辞的構造は、そのテクストのものとされる主題や概念という幻想を破壊するが、そのことが暴露されるやいなやこの構造自体が「新たな統一原理へと転じてしまう」（39）。ゆえに、ド・マンの脱構築、修辞的に読むこととしての脱構築はここで留まることはできない。それは「第二に、テクストの修辞的次元の全体化効果をも脱構築する読解」でもある。テクストは読めないという否定的洞察が修辞の水準で凝結せんとする瞬間に、この読解はテクストの「いっさいの可能な自己回復を回避する」のだ（41）。

> 文学的テクストにとって構成的な自己脱構築のプロセスとは、あらゆる脱構築が再全体化に転じ、かくして再び脱構築される必要が生じるという終わりなきプロセス［endless process］である。（41）

第一の修辞的読解が、「テクストを当のテクスト自身に折り返す」ことによって、結果的にテクストを再び全体化する「もうひとつの身振り」であるとすれば、それはまさしくテクストの自己参照という意味で、「いわゆる脱構築批評」を特徴づけるものであった。ド・マンの脱構築としての「読むこと」は、それとは異なるのである。

> ド・マンにとっての脱構築は、指示性や意味、自らの解釈学的実践の権威、それが生み出す主体性という幻想等々への逆戻りを、終わりなく問い続けねばならない。他方で、いわゆる脱構築批評は、自らの（否定的）洞察の絶対的な安全性・確実性に安んじて落ち着いている。（45）

脱構築としてのド・マンの「読むこと」には終わりがない。そのことは、『読むことのアレゴリー』において、とくにそのルソー論において、一つの章で到達した洞察が次の章でまた疑問に付されつつテクストが進展していく有様からも看て取れるかもしれない。ただ、この「エンドレス」であること自体に批判がないわけではない。たとえばクレア・コールブルックなどもこの終わりのなさ、ないしは永続する脱構築について否定的に言及しているが[6]、「エンドレス」であること自体は一つの否定的洞察としてその「安全性・確実性」に安んじることも可能だからである。

しかし、ド・マンの読解の理論によれば、このような「エンドレス」であること自体も統一原理であり、それもテクストそのものによって脱構築されることになる。ガシェはド・マン自身の表現を用いて、読解されるテクストとは「それ自身の脱構築のアレゴリー的なナラティヴ」であると述べ、修辞的読解という無限のプロセスが何らかの統一性を持つとすれば、それは「時間的なものであるほかない」ことを指摘している。つまり、この統一性は、

> ［たとえば参照主義と形式主義など］二つの異なる読解の相互脱構築的な働きを含み込み、また両者の読解を構造化する全体化原理をも含み込むようなナラティヴであるほかないのである。（47）

読むことのアレゴリーは、脱構築を物語る。あるいは、読むこととは、脱構築の物語としてのアレゴリーなのである。そして、このエンドレス・プロセスを脱構築する物語が起こるのがテクストにおいてであるとすると、テクストが時間的なものにもみえてくる。譬喩や修辞など、あるいは言語自体がこのような「修辞的読解」の推力となっているとされているので、ド・マン的脱構築は構造的なもの、時間とは関係がないかのように理解してしまいそうなのだが、興味深いこと

[6] Claire Colebrook, “Introduction,” *Theory and the Disappearing Future*, Routledge, 2012, p. 21.

に、実は時間こそが物語としてこの修辞的読解に深く関与していることをガシェは指摘している。時間によってのみ最低限、アレゴリーという言葉で「読むこと」を把握することができるのである。

> アレゴリーとは、ひとつの形象として自身を自己完結させるような自らの潜在的な効果を、終わりなく転位させ続けることの形象である。それは時間へと転位された全体性であり、それとして出来することのない全体性のナレーションである。アレゴリーとは、不可能な自己完結へと駆り立てられ続ける全体性なのである。（48）

しかし、これは通常の意味でのナラティブやアレゴリーとは大きく異なっている。ガシェによれば、このアレゴリーが物語るのは、「脱構築のナラティヴを全体化することの不可能性」である。ゆえに、その全体化とここで呼ばれているものの働きは「脱構築という顛倒した働き」であり、そのためこのアレゴリーは「いっさいの認識論的把握を逃れ」ることになる（50）。つまり、このアレゴリーは、始め、真ん中、終わりを兼ね備えているような認識の形式としての物語ではないとガシェは考えているのである。「読むこと」やアレゴリーをはじめとして、ド・マンが論ずるさまざまな概念はすべて「時間化の大渦巻きに例外なく」巻き込まれている。しかしこのことは、逆に言えば、「読むこと」やアレゴリーなどの「脱全体化された形象が、テクストの諸契機の時間的継起にしか当のテクストの安定性を基礎づけられない」ことでもある。「閉じていないことの形象としてのアレゴリーは、テクストの諸契機を、それらの諸契機の時間的展開としてしか要約できない」のである（51）。時間のみがアレゴリーをアレゴリー（なる一つの概念）たらしめる唯一の統一性であり、時間以外にはいかなる関係もこのアレゴリーとは切り結ぶことはできない。

> 継起的な契機と反復的な契機とのあいだのギャップも、いかなる対立関係の両項のあいだのギャップも、アレゴリーは架橋しないということだ。テクストにおける二項対立の両極のあいだのギャップ、あるいは継起的な諸契機のあいだのギャップを架橋することの拒否が、最も徹底した隠喩の排斥としてアレゴリーを特徴づける。（51）

二つのことが前後して起こるだけであり、そこには何の連関も存在せず、両者は断絶している。全く無関係の二つのことが続いて起こるだけなのだ。そこにあるのは、いわば全体性なき全体であり、断絶や孤絶があらわれるためにのみ要請されるような貧しい全体である。テクストが一つのテクストであることの保証は、このような時間による統一性しかない。つまり、脱構築が何度か起こる、そのような場所ないしは容れ物としてのみの同一性である。

ここまでの議論から分かるように、ド・マンにとって「読むこと」とは、人間的な主体による行為ではない。むしろ、テクストあるいは言語の自己展開である。その意味で、「文学批評家がテクストを読んでいるというのは妄想」であるということであり、それどころか、歴史的、形式主義的な旧来のさまざまな読解方法とは「読むことをお払い箱」にしようとするある種の防衛機制である。そのような読解は、実は文学のテクストを読んでいるのではなく、テクスト以外の事柄――たとえば、教育的価値や情報の伝達――を読むことの目的としているのだ。それに対して、純粋にテクストによるテクストを目的とする読解という意味で、ガシェはド・マンの読解を「たんなる読解」とも呼んでいる（156。ただし、このフレーズ自体は『理論への抵抗』のある箇所でのド・マン自身の表現に基づいている）[7]。

上で示したように、ド・マンの「読むこと」はいわゆる「脱構築批評」とは異なるものだが、デリダの脱構築ともまた異なっている。しかもそれは、「読むこと」に関しては自己反照性の問題だけにとどまらない。ガシェは『散種』におけるデリダの『パイドロス』分析にふれて、デリダの脱構築がテクストを代補的に読むとしても、その脱構築こそが「テクストの下部構造的母型を生産」し、そのような読解の「基礎を築く」ことを指摘している。それに対して、ド・マンの読解は、テクストについて「いかなる認識も提供しない」（248）。それはテクストを読むことはできない、という読解不可能性自体を物語るアレゴリーであり、それ以上でもそれ以下でもない。デリダの脱構築が「読むべく与える」のだとすれば、ド・マンの「たんなる読解」はテクストに何も与えることはしない。ド・マンにすれば、読解によって何かを付け加えることはテクストへの不当な介入であり、厳密には「読むこと」ではない。なぜならば、テクストを読むこととは、「意図と意味とから独立した言語それ自体の自律的潜勢力の顕われ」だからだ（277）[8]。そこでは、「関係しないことの力としての言語が、美感的なものと知性的なものとを結びつけたいという夢のいっさいを掘り崩してしまう」（280）。人間に意味の確定を許さない力、理解しようとする意図をくじけさせる力、関係づけるのではなく関係性を攪乱する力、それがド・マンの言う「言語の自律的潜勢力」である。そして、たんなる読解は、このような言語の潜勢力をつぶさに見つめるような読解であるということになる[9]。

しかし、「たんなる読解」にとって、テクストとは言語の力を呈示するようなものだとすると、別の疑問も出てくる。「ド・マンの理解するようなテクストは、あらゆるテクストで作動し

---

[7] ポール・ド・マン『理論への抵抗』大河内昌、富山太佳夫訳、国文社、1992 年、24 頁。

[8] 別の箇所でガシェは、このド・マンのいう「潜勢力」をアリストテレスの「非の潜勢力」との関連で分析し（177）、さらにアガンベンのバートルビー論を参照している（197）。ここからも、デリダの脱構築とド・マンの「読むこと」との違いについてアガンベンを通して（あるいはベンヤミンを通して）考察することもできるだろう。

[9] これほどまでに非人間的な力に対して人間主体がそれを操作したり利用したりすることは全く想像できないが、実は見つめることさえ可能なのかどうかもあやしい。

ている普遍的な言語操作として読まれるのに加えて、そのような言語操作に関して（「特殊性」という言葉を避けて言えば）何か単独的なものとしても読まれうるのだろうか」（288）。つまり、書かれたものであれば何であれ「テクスト」として、言語の自律的潜勢力を発揮しているのかという問いである。言い換えれば、個々のテクストはそのような言語の「普遍的」な力を示す例に過ぎないのか、あるいはそこには何か「単独的」なものがあるのかという問いである。この疑問は、文学作品を読むときにより明確な形で深刻な問題となる。一般的な言語の力を示すために、ド・マンは個別の文学作品を事例として利用しているのかどうかということである。

ここで問題となっているような「テクスト」のあり方を念頭に置きつつ、ガシェは、ド・マンのボードレール論である「抒情詩における擬人化と比喩」を読む。ここでド・マンは「照応」と「忘執」という『悪の華』所収の二つのソネットの関係について語っている。そこでは「忘執」とは「照応」の読解であり、後者を理解しようとする試みであるとされる。「忘執」は、「読んで理解すべき他方のテクストを必要」としており、それが「照応」である。その意味で「照応」を読むのは、「その反転した鏡像的な他者」としての「忘執」である（299-300）。けれども、今まで見てきたように、このような「理解」を目指す「読解」は失敗することを構造的に定められており、読むことは端的に不可能、あるいは読むこととは読解不可能性を読むことでもある。その意味で、「忘執」が読むのは、「照応」を読めないという事態である。「照応」は「第一次テクスト」とされ、その「点的性格」としての単独性を、ガシェは次のように説明する。

> これまでに遭遇したいっさいの対称性にもかかわらず、「照応」による叙情的な「妄執」読解、すなわち「妄執」を理解する読解は可能でない。［…］いかなる様式においても「照応」が「妄執」から派生していることはありえない。「照応」は第一次テクストである。これは、「照応」が「妄執」よりも先に書かれたという意味ではない。ド・マンがはっきり述べているように、たとえボードレールが「経験的な時間において「妄執」の後に「照応」を書いたのだとしても、それは何も変えはしない」。むしろ「照応」が第一次テクストであるのは、それがテクスト以外の何ものでもないから、テクストという出来事にほかならないから、テクストとして現に存在していることの点的性格において説明不可能だからである。そのような第一次テクストとして「照応」は「妄執」を含意し、そもそも「妄執」のようなテクストがなぜ存在するのかを明らかにしている。（301-302）

「照応」のような第一次テクストは、自らを「照らし出す解釈を生産する」ように「誘惑」する。理解へと誘っているのである。そして「忘執」はそのような誘惑に対する応答である。しかしその解釈は「欺瞞的な付け加え」でしかない。それは、「テクスト自身と議論しながら理解にいたったのだと信じるように不可避的に騙されているのであって、当のテクストに到達することはけ

っしてない」。デリダの脱構築とは異なり、このような解釈としての読解が「付け加えられる糸」は、けっして第一次テクストの「織物に編み込まれはしない」（303）。ド・マンはこのような読解を「叙情的読解」と呼び、それが読解の失敗を通して主体性の回復を目論んでいることを指摘している。そしてそれは「穢れなき」純粋な読解である「たんなる読解」とは全く異なるものである。

> たんなる読解は付け加えるのでなく、無感覚な列挙の「のように」のように反復する。これは、ド・マンの言葉で言えば「散文的」読解であり、ほかならぬ言語の恣意的な措定力こそを反復する読解である。かくしてたんなる読解は、たんなる読解それ自体になる。したがって原テクストと同じく説明不可能となり、説明の責任を免れる。つまりたんなる読解は、第一次テクストという縮減不可能なまでに理解不可能な出来事を再演する［…］。（304）

ここで柄谷行人が証言する「私が“テクスト”と呼ぶものは限られている、何でも書いたものであれば、“テクスト”だということはない」というド・マンの言葉を想起してもいいだろう[10]。あるいは、デリダは「ルソーを必要としていませんし、他の誰も必要としていません。私はそれらをひどく必要としています」というド・マン自身の言明について考えてみてもいいかもしれない[11]。すなわち、ド・マンが見るところボードレールやルソーの著作は数少ない（第一次）「テクスト」なのである。そして、ガシェの言葉で言えば、「テクスト」とは「何らかの問いに対して自らが出す応答の特殊性ゆえに唯一的なのでもなければ、自らの形式において問いを解決する様式の特殊性ゆえに唯一的なのでもなく、ほかならぬ当のテクストであるという言語的出来事としての質ゆえにこそ唯一的である」（308）。それほどまでに特別な「テクスト」が、少数ながらこの世には存在しているという信念をド・マンが抱いていることがわかる。ただし、繰り返すが、このような「テクスト」は「唯一的」という言葉で理解できるものではない。それは、もっとも根本的な意味で理解や読解を寄せ付けないものなのである。それ自体は何も付け加えられることなく、そのままそれ自身であり続けるにもかかわらず、欺瞞と誤謬ではあっても、なんらかの応答を求め続ける。それがテクストである[12]。

---

[10] 柄谷行人「ド・マンは何を隠したのか」『思想』1071 号、2013 年、297 頁。
[11] ド・マン『理論への抵抗』、233 頁。
[12] このテクスト概念――じつは概念ですらないのだが――は、インターテクスチュアリティなど、複数性や他者性に深く関わるテクスト概念とは大きく異なっている。「テクスト text」という言葉は、さまざまな糸によって織られたもの、布地にその語源を持つために、他者への開かれこそがその本質をなしていると考えられるだろう。これに対して、それ自体は認識を逃れつつも、副次的な諸テクストに影響を与えるという、まるで反物質のようなド・マンの「テクスト」は、不毛であるとまでは言えないまでも生産性という価値判断の観点からはまさにその正反対にあるだろう。しかしそうであっ

『読むことのワイルド・カード』において、ド・マンの仕事に対するガシェ自身の評価は――必ずしも前面には出ることはないものの――各章の執筆時期にしたがった変化している。おおまかにいえば、第一章のみが好意的でありその他の章では批判的である。ただ、ことド・マンの「特異性」や単独性について考察する限り、筆者ガシェの評価はさほど問題にはなってない。彼にとって、ド・マンの仕事は「説得力があるのではないが不気味にも首尾一貫している「理論的」プロジェクト」であって（92）、それに対して同意はできないものの、敬意を払わざるをえないものである。ド・マンについてガシェがとる立場はそのようなものであって、そのド・マン読解も一筋縄ではいかない。

> ヴァレリーがどこかで言っていたように、すでに考えられたことは十分に考えられたことではないので、考えることとは再考することを意味するのならば、ド・マンの仕事についての十年以上にわたる私の評価の変遷は驚くべきことではない。本書において、ド・マンの著作についての私の評定の揺れが修正されていないとしたら、それは主に次のことを強調するためである。すなわち、ド・マンの独特な仕事にふさわしい探求法とは、一連の「プロセス」であり、そこにおいて思考は彼の仕事についてくりかえし再考する必要性へと開かれたままでいなければならない。（22）

ガシェ本人は認めないだろうが、ド・マンの仕事が「第一次テクスト」であるとも言えるのかもしれない。しかしそうだとしても、それを理解することはできない。読むことはできず、単独的なものとして、「テクスト」とともにド・マンも理解の彼方に消えゆく。しかし、テクストはたしかにある。認識はできないし、「存在」しているとさえも言えないのかもしれないが、失敗を運命づけられた読解をわれわれから求めている。「ド・マンとその著作が表している単独的な出来事は何らかの応答を要求している」のである（11）。ガシェは「知的理解へのすべての試みを拒むような単独性の思想家として」理解することを試みるが（14）、そのような試みの結果、ド・マンの仕事の単独性がはっきりと呈示されて見えてくるのではなく、むしろそれは理解の地平の彼方に消尽する。しかもそれはもっともラディカルな意味で消え去る。つまり、消え去るという意味が消え去る。消えることさえも消えるのである。それほどまでの意味の零度なかで、この『読むことのワイルド・カード』というプロセスは動き続ける。消えることさえも結論とはなりえず、さらなる読解へとその必要はつねに――われわれに――要請され続けている。

てもその位置の点を想定することはできるかもしれない。ここから長さも広がりも持たない、全く内容がないもの、点としてのテクストにかかわる新たな形式主義を構想できるかもしれない。